

『鹿島重好歌集』について

渡 邊 健

(米子工業高等専門学校)

摘 要

江戸時代の米子の豪商・鹿島家は、幕末に多くの歌人を輩出したが、鹿島重好はその中でも特に優れた歌人である。重好の歌集の存在は今まで知られていなかったが、最近になって、米子市立図書館に『鹿島重好歌集』が所蔵されていることが明らかになった。この歌集はあとがきによれば、昭和四八年に重好の曾孫・服部喜久恵が重好自筆本を写したものとあり、書写の時期は新しいが、内容を確認したところ、おそらく原本を直接写したものと見られる。また、歌集所収歌を当時の類題和歌集等に入集した重好の歌と比較・検討した結果、その原本は重好の自撰歌集であった可能性が高いと考えられる。

キーワード…鹿島家 鹿島重好 米子歌壇

一、『鹿島重好歌集』発見の経緯

去る二月一日(平成三〇年)、『鹿島家和歌資料の語るもの―米子城下の幕末ルネッサンス―』と題して、鹿島家の和歌資料に関するシンポジウムが米子市立図書館で行われた。コーディネーターは、平成二二年に鹿島本家旧蔵の短冊帖や歌集・歌書類を含む貴重資料を初めて調査・紹介された原豊二氏(種下) (ノートルダム清心女子大学)が務められ、それら和歌資料の価値と魅力について解説された。また、稿者と辻本桜介氏(米子工業高等専門学校)がそれぞれ和歌文学・日本語学

の立場から研究報告を行い、書誌学・文学・語学の学際的アプローチによる総合的検討を行った。このシンポジウムは、事前に『山陰中央新報』で新聞記事として取り上げられ(二月六日付)、鹿島本家短冊帖等二十数点の貴重資料が会場内に展示されたこともあって盛況であり、来場された市民の方々が米子の文化の素晴らしさを改めて知る機会になったものと思われる。

その後、米子市立図書館主査であった大野秀氏から、同図書館の書庫を整理していた折に、『類題鮫玉集』や『鹿島重好歌集』を含む資

料数点が見つかったので、一度見てもらえないかというお話があった。今から四〇年前、個人からまとめてダンボール一箱分の資料が寄贈されたものらしいとのことであったが、稿者はそれまで見てきた鹿島家と歌資料の中に、鹿島重好の歌集の存在をうかがわせるようなものはなかったため、やや意外に感じながら依頼を引き受けた。後日、実物を確認したところ、鹿島重好自筆本ではなく、重好自筆の歌集をその曾孫に当たる故服部喜久恵氏が昭和四八年に書写したものであることがあとがきに記されていた。ただし、この写本は書写年代こそ新しいものの、袋綴の和紙の冊子に美麗なくずし字で書かれており（写真2・3）、以下説明するように、本文の内容から見ても、おそらく明治中期に成立したと思われる重好自筆本を直接書写したものと考えられる。

一方、重好歌集の原本は、現在ではその行方が分からなくなっており、重好を祖とする鹿島分家（岩鹿と称する）や、鹿島本家・下鹿島家のご子孫の方々に話を伺っても、そのような本は家に伝わっていないとのことであった。米子市立山陰歴史館に収められている鹿島本家・下鹿島家旧蔵資料の中にも『鹿島重好歌集』はなく、服部氏の子孫も県外に転出して、原本の行方を知る手がかりが失われている現在、この資料について調査した内容を公にすることも相応の意義があると考え、以下に紹介する。なお、本稿では主に、この歌集が鹿島重好自筆本を直接書写したものとみておそらく間違いないこと、またその原本が重好の自撰歌集であった可能性について検討する。『鹿島重好歌集』の翻刻本文の全文は、平成三十一年三月刊行予定の『米子工業高等専門学校研究報告』第五四号に掲載するのでそちらを参照されたい。

二、書誌、書写者について

本書は袋綴一冊の写本で、縦二四・三種×横一六・六種、半紙本ほどの大きさである。表紙は厚紙の表に植物の文様を透かし織りにし金糸で花を刺繍した黒い布を張り、中央に本文と同筆で「鹿島重好歌集」と書かれた題簽を貼付している（写真1）。本文八二丁、前後に遊紙が一丁ずつある。本文は先述した服部喜久恵氏が書写したもので、一面四〜九行書き。和歌一首二行書で、一面に和歌が二首ずつ、題や詞書と共に記されている。鹿島重好の自筆歌集は本来二九三首を収めたものであったとみられるが、本書ではその後、「歌集の歌の外に」として、歌集に見えない重好の歌六首を載せる。

さらに、「重好翁を偲びて」と題する服部氏の歌五首を載せ、「鹿島重好翁の事ども」として重好の略伝と人となりなどが紹介される。そして最後に、

此の度郷土の古文書研究家安達一彪先生の御懇切なるおすゝめにより拙き筆をもかへりみず重好翁歌集その他に残れる短冊書幅等の歌を取りまとめ書写して米子市図書館に寄贈す。

遺稿をよみて追慕の情に堪えず

曾孫 七十五 姫服部喜久恵

謹みてしるす

昭和四拾八年 師走

と、この歌集を書写した経緯が語られている。（写真4）

本書の保存状態は良好であり、若干染み汚れ等あるものの、文字の判読に差し支えるような箇所はなかった。

この歌集を書写した服部喜久恵氏は、鹿島重好の曾孫に当たる女性で、明治三二年（一八九九）米子市灘町に生まれ、高等小学校卒業後、

大正二年（一九一三）塩や醤油の販売を営む商家の服部家に嫁した。短歌・俳句・茶道・書道に優れ、昭和五四年に歌集『風鈴帖』、昭和六〇年に句集『一人静』（いずれも私家版）が刊行されている。『風鈴帖』には、服部氏と短歌の贈答などを通して交流のあった知恩院門跡・岸信宏氏の序があり、そこには服部氏が『鹿島重好歌集』を写真したと聞き、閲覧のために送ってもらったこと、『風鈴帖』が『鹿島重好歌集』と共に米子図書館に寄贈される予定であることが書かれている。こうした傍証もあるので、『鹿島重好歌集』がそのあとがきに記されるように、「重好翁歌集」に補遺歌を加えて成ったものであることは疑う必要はないと思われるが、後の第四節において、歌集所収歌と他の資料に見られる鹿島重好の歌との比較を通して、服部氏の書写した「重好翁家集」が確かに重好自撰の歌集であったかについての検討を行いたい。

三、鹿島家と鹿島重好について

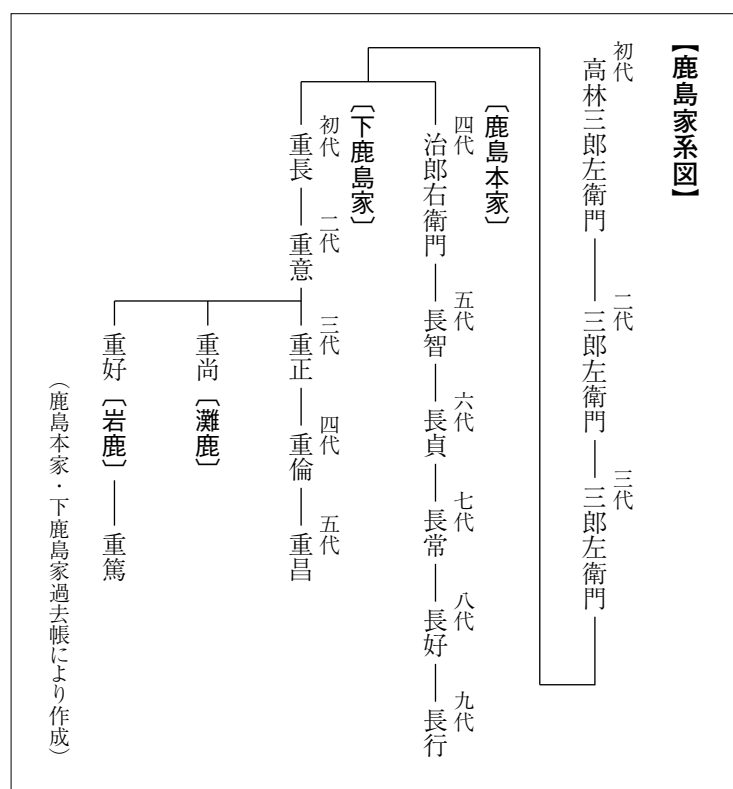
鹿島家は江戸時代中期から明治初期にかけて栄えた米子の豪商で、本家四代治郎右衛門の頃から米穀類・綿業や醤油・質等の商売で富裕になり、近国にも知られる存在になった。^(注2) 鹿島家は本家・分家が資本を出し合い、一族の者が「心学」の教えに従って儉約を守ることによって富を蓄積し、鳥取藩や米子城家老の荒尾氏もその財力に期待をかけるようになった。鹿島両家は町年寄・為替蔵出資等で町政にも貢献し、また幕末の米子城四重櫓の改築や海岸警備のための御用金拠出等を始めとして藩財政の窮乏を度々救い、繰出金は数万両にも及んだことは有名である。

鹿島家の家訓では奢侈や風雅を好むことを戒めていたが、五代長智

『鹿島重好歌集』について（渡邊 健）

の頃から文雅に親しむ風を生じ、一族の中から和歌・俳諧・茶道等に深い造詣を示した者を輩出した。長智は紀州の国学者・歌人本居大平の門人と伝え、安政六年（一八五九）刊の『国学人物志』には、伯耆国の国学者八人の一人としてその名が見える。^(注3) また、下鹿島家三代の重正は米子歌壇の中心的存在であり、当時盛行した加納諸平編『類題鯁玉集』三編の「作者姓名録」（天保一二年（一八四一）刊）を編んでいる。おそらく出版に係る資金も提供したのであろう。『類題鯁玉

【鹿島家系図】



『集』は嘉永七年（一八五四）刊の七編まで次々と編まれたが、その中に鹿島家の人物としては長智・重正・重尚・重好の名が見える。『鯉玉集』に入集はないが、鹿島本家九代の長行は長澤伴雄編『類題鴨川集』・黒澤翁満編『類題採風集』には歌が採られており、当時鹿島家で行われた歌会・歌合を書写した『嘉永六年十一月十日鹿島家歌合』『無題歌合集』^{（注4）}を始め、多くの和歌に関する資料を遺している。

鹿島重好は天保元年（一八三〇）下鹿島家二代重意の四男として生まれ、嘉永七年（一八五四）分家して岩倉町に邸を構え、岩鹿と称した。その財力と聡明・温厚な人柄で、藩当局の信頼も厚く屢々町の要職を務め、慶応元年（一八六五）以後は町年寄の役に就き、明治二年（一八六九）の荒尾氏による自分手政治廃止後も町年寄役を命じられた。重好が町年寄として記録した慶応元年から明治元年までの『御用日記』は、維新前後の米子に関する重要な資料である。藩政改革後も町政に与り、明治一〇年（一八七七）には初の島根県会議員になった。明治二五年（一八九二）六二歳で没し、墓は米子市寺町の心光寺にある。

服部喜久恵氏が「鹿島重好翁の事ども」に記しているところでは、重好の「趣味も和歌、茶道、俳諧、絵画、雅楽、等多方面にわたりそれ〴〵に円熟し……そのころの歌人飯田年平小谷古蔭氏等は長期にわたり同家に止宿せられしこともある由」、「その詠草は鯉玉集鴨川集等に数首掲載されている。歌集一卷筆跡美しき短冊書軸等数多残存す」とあって、風雅を嗜む中でも特に和歌を好んでいたらしいことがうかがわれる。重好自筆の歌集の他に和歌の短冊・書軸が数多く伝わっていたとも書かれているが、後述するように、現在は短冊数葉が存するのみである。

重好が詠歌に非常に熱心であったことは、鹿島本家の長行が主催し嘉永六年（一八五三）一〇月から安政二年（一八五五）正月にかけて鹿島家で行われた歌会・歌合に、二〇度中一五度も参加していることから知られる^{（注5）}。幕末頃、鹿島家で催され、米子在住の士分・商人・医師・僧・神職等が参加して活況を呈した米子歌壇で、重好は長行と共に中心的な存在であったと思われる。

江戸時代末期には多くの類題和歌集が編まれ、全国の地方歌壇の活性化と成長を促したが、重好も当時の類題集には関心が高かったようである。加納諸平編『類題鯉玉集』には、嘉永七年（一八五四）の七編に一首が載るのみであるが、長澤伴雄編『類題鴨川集』には、嘉永四年（一八五二）の三郎集に五首、同五年（一八五三）の四郎集に一首、同七年の五郎集に一首が採られている。同じ長澤伴雄編『鴨川詠史集』には大正二年（一九一三）刊の二編に一首、黒澤翁満編『類題採風集』には安政四年（一八五七）刊の二編に六首が載る。また、中島宜門編の『類題稻葉集』（安政二年刊）には一首が採られている。

『鹿島重好歌集』には、詠歌年代の分かるものだけでも、弘化四年（一八四七）～明治一七年（一八八四）、重好一八歳から五四歳の歌が収められており、さらに辞世歌も含まれるため、重好が若年から晩年に至るまで和歌を読み続けたことは間違いない。ただし、彼が最も盛んに歌を詠んだのは、米子歌壇が活発に活動し重好も熱心に類題集に和歌を投稿した、嘉永から安政期にかけての二十代の頃であったと思われる。

四、『鹿島重好歌集』と他資料との比較

第二節で述べたように、『鹿島重好歌集』が重好自筆の歌集を直接書写した本であることは、そのあとがきに記されるところを信じてよいと思われるが、稿者がこれまで調べた範囲では、同時代の文献等に重好に歌集があつたことを裏付けるものはない。

そこで本節では、同時代の他資料に見られる、重好の和歌であることが明らかかな歌と、『鹿島重好歌集』の歌の本文とを比較する作業を通して、服部喜久恵氏が書写した原本が確かに鹿島重好の編んだ歌集であつたかの検討を行いたい。『鹿島重好歌集』の詞書には、重好本人の記述によるものであることを窺わせる箇所もあるが、内部徴証から歌集全体を重好の手に成るものと結論づけることは難しい。また、歌集に収められた歌が全て重好の歌であつても、たとえば服部氏が曾祖父の顕彰のために、重好が遺した資料をもとに歌集を編んだ可能性も全くないわけではなく、その場合それは他撰歌集となり、作者の何らかの創作的動機によつて編まれた自撰歌集とは別の扱いをしなければいけなくなる。

そこで、やや迂遠な方法ではあるが、重好の歌であることが明らか以下の(1)～(6)の資料と、歌集所収歌とを比較することにより、『鹿島重好歌集』の編集に働いている意識を検討し、それが重好以外の第三者によつてなし得るものかということを明らかにしていきたい。

(1) 鹿島本家旧蔵(現山陰歴史館蔵)『無題歌合集』

嘉永六年(一八五三)一〇月から安政二年(一八五五)正月までに鹿島家で行われた二〇度の歌会・歌合を鹿島本家九代の長行が書写・集成したものである。鹿島重好はこのうち一五度の歌会・歌合に参加

『鹿島重好歌集』について(渡邊 健)

し、合計五〇首の歌を詠んでおり、その中の九首が『鹿島重好歌集』と共通する。

以下、その共通歌の本文を掲出し、歌集の歌番号と本文異同を括弧内に記す。二〇度の歌会・歌合の中、いずれの機会に詠まれたものであるかは、丸数字と『無題歌合集』内での呼称で示す。また、鹿島家で歌合が行われた場合、判者が「抜き歌」と称して秀歌を選抜したものが付載されているのが通例である。判者による添削が施されていることも多いが、重好の歌が抜き歌に選ばれている場合は、それも付記する。

①神無月朔日略会詠歌 青々庵

初冬

山川の瀬、のしがらみ風越えて紅者流る、冬は来にけり

(集180 四句「紅葉流る、」)

②十月十九日略会 滄廼舎

霰

おし鳥の明けて別れし朝床の玉藻みだれて霰降る也

(集172 二、四句「鳴きて別れし朝床に玉とみだれて」)

③十月二十八日略会 虎嘯軒くさぐさ

早梅

春をのみ待つらん梅のほ末よりにほふは雪の花かあらぬか

(集184 三句「梢より」)

④霜月二日略会 日孝^(後8)

埋火

かひなれし手さへ放れて唐猫の夜たゞねぶれる埋火の本

（集182 二句「膝のへかれて」

⑧兼題 馬 古蔭撰

久かたの月毛にかゝる隈なしてをぶちの駒はいつ■てきけん

（集259 五句「おひ立ちにけり」

（判者・小谷古蔭による抜き歌）

久かたの月毛にかゝるくまなしてをぶちの駒はおひ立ちにけり

⑩網代

顕恋

人しれぬおもひの水とけしより小河の瀬ゝに波さわぐ也

（集196 初句「むすばれし」・四句「うき瀬あまたに」

（古蔭による抜き歌）

結ばれしおもひのこほり解けしよりうきせあまたに浪さわぐ也

⑭山家鶯 春恋

山家鶯

松の戸は春ともしらぬ暁の夢おどろかし鶯のなく

（集30 異同なし）

（古蔭による抜き歌）

松の戸は春ともしらぬ暁の夢驚かし鶯の鳴く

⑮田家梅 鐘

田家梅

小山田の朧月夜にきて見ればふせ家の軒に梅かをる也

（集62 四句「ふせ庵の軒に」

⑲題 朝落葉 炭竈 橋 喜陰評

橋

嵐吹く谷の柴橋今は世に通ふ夢路もかれくにして

（集276 題「山家」・四句「通ふ夢さへ」

（判者・佐々木喜陰による抜き歌）

嵐吹く谷の柴橋しばし世にかよふ夢さへすべなかりけり

本文異同を見ると、歌会・歌合でその歌が詠まれた時の本文と、歌集の本文との間で、語句が異なる場合が多いことが分かる。ごくわずかな差異については、服部氏が原本を書写した段階での誤写の可能性も想定されるが、大きな語句の異同がある場合をどう考えるかが問題になる。また、「馬」題の「久かたの」歌・「顕恋」題の「人しれぬ」歌のように、抜き歌で判者に添削された形の本文の方が歌集に収められている例があるのも注目される。このような歌の表現の異同は、やはり他者の所為とは考えにくく、重好が歌集を編む際に、かつて自分が詠んだ歌の意に満たない表現を改めたことを意味すると見られる。また、『無題歌合集』に見られる重好歌五〇首の中、歌集と共通する歌が九首と少ないのも、歌集編集時の重好の意識を反映していると考えると理解しやすい。鹿島家で催されていた歌会・歌合は、同じ歌人が同題で何首も歌を詠み提出し、歌合の場合は判者がしばしば歌を添削しているように、多分に歌学びの場としての性格が強く、秀歌は多くなかったという認識から、重好は歌集への採歌を厳選したものである。

(2) 加納諸平編『類題鰻玉集』

『類題鰻玉集』は江戸時代後期、各地で出版された類題和歌集の中でも最大のもので、文政十一年（一八二八）の初編以来、嘉永七年（一八五四）の第七編まで刊行された。『鰻玉集作者姓名録』も出版され、第三編の姓名録は重好の兄・重正が編集したものであることは先述した通りである。重好の歌は第七編に一首採られているのみであるが、そのままの形で歌集にも収められている。

雪中梅

春寒さみ雪ながらの朝風に山ふところは梅かをるなり

（集24 異同無し）

稿者は未見であるが、安政四年（一八五七）の加納諸平の急逝により、稿本のまま未刊で終わった『類題鰻玉集』第八編が現在、岡山の正宗文庫の所蔵になっており、中澤伸弘氏の調査によれば、作者の中には鹿島重好の名が見えるそうである。^{（注9）}

(3) 長澤伴雄編『類題和歌鴨川集』・『鴨川詠史集』

『類題和歌鴨川集』は、加納諸平と交流があった（後に対立）長澤伴雄が、『類題鰻玉集』に対抗して編んだ類題集である。嘉永元年（一八四八）の太郎集（初編）以降、編を重ねることに収載歌人とその地域が増加・拡大し、嘉永七年（一八五四）の五郎集までほぼ毎年刊行されて人気を博した。重好の歌は、嘉永四年の三郎集から同七年の五郎集までに計三二首採られているが、その中の二四首が『鹿島重好歌集』と一致する。

①類題和歌鴨川集 三郎集 嘉永四年

暮秋時雨

もみぢ、るかた山つゞき秋たけていまはの月にしぐれふるなり

（集141 三句「秋更けて」）

海辺冬月

磯ちどりつばさの波をかけしより真砂にこぼる月の影かな

（集166 二句「翅の雫」）

乍臥無実恋

なには江の芦のかれ葉のふしながら猶打ちとけぬ薄ごほり哉

（集194 初句「難波江や」）

青

かげうつる遠山あるの色よりもふかきは海のこゝろなりけり

（集222 初句「かげうつす」）

②類題和歌鴨川集 四郎集 嘉永五年

若菜

雪わけてつみしわかなの跡にのみあらはれ初むる春のいろかな

（集1 二句「摘める若菜の」・四句「あらはれそめし」）

海辺花

磯ぎはのしらなみ沖にかへらなんよすれば花の散りもこそすれ

（集22 初〜四句「沖津波磯のしら波吹きかへせ寄せなば」）

春の歌の中に

花にねし春の日数もくれにけり小てふの夢も今かさめなん

（集21 下句「あはれ胡蝶の夢ばかりにて」）

『鹿島重好歌集』について（渡邊 健）

樹陰納涼

杉むらは木蔭寒けしゆく水に夏もながるゝここちのみして

（集7 異同無し）

翠園六勝の中に閑庭月色といふことを

いろふかき苔のむしろの露の上にかたぶく月のかけをしぞ思ふ

（集129 題「閑庭月色」）

故郷萩

ふるさとの篠のあれ垣あれはて、残るもあはれ秋はぎの花

（集132 二句「篠のあし垣」）

枯野

賤の女が結ぶ影見し山の井の水のこゝろもこほる冬かな

（集183 題「氷」・二句「結ぶかけ見えし」・五句「氷る水かな」）

竹叢

竹むらの夜風を寒みぬる鳥の夢もとだえてあられふるなり

（集164 題「叢」）

人の亀三つかける画をおくりけるに歌こひければ

かめのをの長きを君が心にてともにへてまし万代までも

（集290 詞書異同は後述）

③類題和歌鴨川集 五郎集 嘉永七年

浦霞

よる波もこのごろたえて磯の海の霞にとほきあまのよびごゑ

（集19 三、四句「磯の浦のかすみてとほき」）

若草

朝日かげにほへる岡の雪きえて小草のみどり春めきにけり

（集7 異同無し）

鳴

身につもる秋のあはれやかぞふらん沢田のしぎのよはのはねがき

（集136 五句「おのが羽がきに」）

八月ばかり出雲の玉造の里にありて

湯あみすとよひくかよふ細殿のひまもる月もみなれつる哉

（集226 詞書「八月ばかり玉造の温泉にてよみる歌の中に」・五句「みなれけるかな」）

菊

きくの花つみいるゝ子が袂よりにほふやちよのあまりなるらん

（集147 異同無し）

千鳥

入りがたの月やめぐれる川島のすさまばらにちどりなくみゆ

（集162 五句「千鳥鳴くなり」）

朝霞

をし鳥の鳴きてわかれし朝床に玉とみだれてあられふるなり

（集172 題「霞」無題歌合集②「霞」）

歳暮松

ゆく年のすゑ野の小松雪ながら春にひかるゝ色も見えけり

（集173 四句「春にひかれん」）

夏恋

妹とわがあひにあふちも時過ぎてうすくなりゆく花ごゝろ哉

（集193 異同無し）

山家橋

あらしふく谷の柴橋しばしよにかよふ夢さへかれくにして

（集276 題「山家」無題歌合集⑯「橋」）

八月ばかり出雲の玉造のさとにありて白居易が思故郷といふ
詩のこゝろをおもひいで、

あふぎみるたかねの月のくまなれやこゝろにかゝるふるさとの雲

(集227 詞書「同所(玉造の温泉)にて 拳頭望山月低頭思古
郷と云ふ白居易が詩のこゝろを」・五句「古郷の空」)

多くの歌で本文上の異同が見られるのは、歌集採録時に語句の改変
を行ったことによるものと見られる。また、採られた歌の数でいえば、
重好は同時期の『類題鰻玉集』より『類題和歌鴨川集』の方が明らか
に多いが、これは重好と伴雄の間に私的な交流が盛んに行われていた
ことと対応するものと思われる。原豊二氏は長澤伴雄の歌文集『絡石
の落葉』から伴雄と米子の歌人たちとの交流を紹介し、特に重好から
画賛や短冊の和歌の依頼が頻りにあったことや、重好の母の死に関連
して伴雄が歌を詠んでいることなどを明らかにされている。これは服
部氏のあとがきに、「伴信友長沢伴雄氏等とも文通し和歌その他の教
示を受けしものと思はれる」とか、重好の遺品として「長沢伴雄の書
簡短冊等もあり」との記述があるのと符合する。

なお、先掲②の「かめのをの」の歌について、『鴨川集』の詞書で
は「人の亀三つかける画をおくりけるに歌こひければ」とあるが、歌
集では「出雲国神代朝輿夫婦が七十の賀に亀の絵に」と、詠歌事情が
具体的に記されている。この詞書は、直接その事情を知る本人にしか
なし得ないものであり、服部氏が書写した「重好翁歌集」が本人の自
撰に成ることの一つの例証になると思われる。

④鴨川詠史集 二編 大正二年

『鴨川詠史集』は、長澤伴雄が『類題和歌鴨川集』の付録として編
纂し、諸家の詠史和歌を収録した歌集である。「詠史和歌」は、歴史
上の人物や事柄を題にして詠んだ和歌で、江戸時代後期から幕末にか
けて大いに流行した。『鴨川詠史集』に重好の歌は、嘉永六年の初編
にはなく、大正二年刊の二編に二四首が載るが、『鹿島重好歌集』と
の一致はその中わずかに五首である。^(注13)

倭建命

かりそめにおきてわかれし枕太刀終のかたみとなりけるかな

(集216 異同無し)

源三位頼政卿

くらゐ山かへり見すれば木隠れて見し夜の月はうらゝなりけり

(集265 五句「ふもととなりけり」)

小松内大臣重盛公

ちとせをもまたで枯れぬる小松こそ深き根ざしのありてなりけめ

(集217 題「重盛公」)

大石良雄

いまさらにいかでゆるがむ君がためたてしちびきの石の下根は

(集213 異同無し)

明智光秀

天の下すでおほひて五月雨の世にふり出でしもときの間にして

(集219 初句「天が下」・四句「ふるかと見しも」)

重好は詠史和歌への関心が決して低かったわけではなく、『鹿島重

『鹿島重好歌集』について（渡邊 健）

好歌集』の雑部には、八六首中二三首もの詠史和歌がある。ただし、『鴨川詠史集』二編は、編者・長澤伴雄の没する安政六年（一八五九）以前に一旦成っていたが生前には出版できず、遺稿を息六郎が大正二年（一九一三）に刊行したものであり、明治二五年（一八九二）に没した重好は、自分の歌が一四首も採られていたことを知る由もなかったのである。これは憶測になるが、もし重好が歌集を編むまでに『詠史集』二編が刊行されていれば、重好の伴雄尊重の念からいっても、そこから歌集に採られた歌の数はもっと多かつたかもしれない。

(4) 黒澤翁満編『類題採風集』

黒澤翁満編の『類題採風集』に重好の歌は、嘉永六年（一八五三）の初編にはなく、安政四年（一八五七）の二編に六首が採られている。『鹿島重好歌集』には、その六首が全て見える。

春水

うらくとわたる春日の影見えて野川の水もいそぐともなし

（集38 異同無し）

霞遠聳

玉だすきうねびをかけて古里のかし原遠く立つ霞哉

（集11 異同無し）

若菜

雪分けてつめる若菜の跡にのみあらはれそめし春の色哉

（集1 異同無し）

梅薫袖

人しれぬこのわかれちの梅の花袖に匂ふも折にこそよれ

（集45 題「春の歌の中に」）

待郭公

去年の夏き、しあたりはほと、ぎすなかなぬ空さへなつかしき哉

（集91 異同無し）

秋山家

此の頃はなれし軒端の松風も浮世の秋のおとづれぞする

（集134 題「山家秋」）

先に見た(1) (3)では、他資料と歌集との間に本文上の異同が多く見られたが、『類題採風集』の場合は歌の語句が全く変わらなずに歌集に収められていることが注目される。

『採風集』に著名な歌人は少ないが、二編の序文は米子の歌人で鹿島家の歌合にも参加している中林古樹が書いており、和歌の選定にも関わったものと考えられる。この二編には、日孝・大谷友愛・森知方・鹿島長行・同重好・三好秀興・同秀年など米子の歌人の名が多く見えるが、鹿島長行がこの集に投稿するために編んだ資料である『採風集二編料』が現存することを原豊二氏が紹介されている。^(註15)ただし、この資料は収める和歌が二二〇首であるのに対し、実際に『採風集』二編に採録された長行の歌はわずか五首に過ぎず、和歌の選定の基準が厳しかったことが想像される。

重好も長行と同様に、投稿のための資料を編んで提出するという手続きを踏んだであろうが、おそらく採歌の条件が厳しかったために、最終的に選歌された六首を重好はよく覚えており、後年歌集を編集す

る際にその全てを、歌の語句も変えずに採ったのではないかとと思われる。またその観点からいえば、「若菜」題の「雪分けて」の歌は歌集の冒頭である春部の始めに置かれているが、歌集の歌番号五・六・一〇は「立春」題なので、本来はこれらが集の最初にあるべきである。また、「待郭公」題の「去年の夏」の歌は、歌集の夏部の冒頭に置かれているが、これも一般的な配列の原則からいえば九九「行路卯花」が先に置かれるべきである。この歌集では、四季部の配列が必ずしも時間の推移に従っていないことは後述するが、『類題採風集』入集歌を巻頭歌の位置に据えるこれらの例は、重好にとってこの集への入集が特別な意味を持っていたことを表すのではないかと考えられる。

(5) 中島宜門編『類題稻葉集』

『類題稻葉集』は、因幡の歌人・国学者の中島宜門が鳥取藩内の近古の歌人の歌を撰した類題和歌集で、特に文化・嘉永期の歌人の作を多く収める。重好の歌は一首が入集するが、その中で『鹿島重好歌集』と共通するのは九首である。

款冬

山吹の色なる池の月影にうつる心は花ぞ知るらん

(集78 題「月前山吹」)

時雨

大神は雪より明けてぬば玉の夜見の松原しぐれふるなり

(集171 題「暁時雨」・三句「うば玉の」)

『鹿島重好歌集』について (渡邊 健)

顕恋

結ばれしおもひの水とけしよりうきせあまたに波さわぐ也

(集196 異同無し 無題歌合集⑩) 「顕恋」

寄棟恋

妹とわがあひにあふちの時過ぎてうすく成り行く花心かな

(集193 異同無し 鴨川集五郎集・恋・寄棟恋)

寄軽業師恋

思ひきやわたす小縄のひとすぢに玉の緒かけて恋ひんものとは

(集197 二句「わたる小綱の」)

旅泊夢

みなど出でていく夜浮きねのたゆたひに夢路をあらす沖つ白波

(集211 異同無し)

窓前松濤

よもの海静かなる世にたつ波は窓うつ松の風なりけり

(集210 異同無し)

詠史

たどりよる縄の湊の大御舟かゝるうきせも有る世也けり

(集209 異同無し)

北野天満宮九百五十年神忌に松添春色

生ひいでしむかしながらの一夜松ひとよに春の色ぞ添ひ行く

(集208 詞書「北野天満宮 九百五十回神忌奉納 松添春色」集8に題「松添春色」として重出)

「寄軽業師恋」題の「思ひきや」の歌以外は、ほとんど歌の語句に

異同がない。また、『類題和歌鴨川集』に採られた「寄棟恋」題の「妹

とわが」以外は、『鹿島重好歌集』にしか見えない歌ばかりであり、『無題歌合集』に重出する「顕恋」題の「結ばれし」も、鹿島家の私的な歌合の機会で詠まれた歌である。おそらく中島宜門が『類題稲葉集』を編むに当たって広く藩内の歌人たちに詠歌を求めたとき、重好は自ら秀作と自負する歌を選んで候補歌を提供したのであろう。『類題稲葉集』に採られた重好の歌一首の中で、『鹿島重好歌集』と九首も共通し、その歌の語句にもほとんど異同がないことは、『類題稲葉集』に採録された歌も重好にとつては秀歌として特別な意味を持っていたと考えると理解しやすいのではないかと思われる。

(6) 鹿島重好自筆短冊類

数は少ないが、鹿島重好自筆の和歌短冊が数点現存する。これらは、歌集にその歌が見えないものも含めて全て紹介する。

① 鹿島美彦家資料（山陰歴史館所蔵）

下鹿島家に由来する資料は、現在米子市立山陰歴史館に「鹿島美彦家資料」として所蔵されているが、その中に鹿島重好の自筆短冊三枚が確認できる。

うち一つは、下鹿島家三代の重正が四十歳の算賀の折に製作された短冊帖で、九六枚を収める。鹿島家と和歌や茶道を通じて交流のあった出雲大社の千家尊孫の詠を冒頭に置き、以下、出雲歌壇の歌人や米子歌人の歌が並び、最後に鹿島家の歌人たちの短冊が収められるが、重好のものが最後から二番目にある。

人なみに春ををしまし桜花君は見む世の限り知らねば

（集 262 詞書「重正兄初老春祝」・二句「散るもをしまじ」）

重正は文化一三年（一八一六）生まれなので、「初老」つまり四十の算賀が行われたのは安政二年（一八五五）のことであろう。

また、その他に短冊が二枚ある。

重倫兄がもとの家にかへりて初老の賀をしけるをよるこびて

あし鶴の是やちとせの宿ならむ立ちかへり住む庭の松が枝

山雪

月に啼くたづがねさえて八重山の雪のひかりはしづけかりけり

（集 188 異同無し）

「あし鶴の」の歌は歌集には見えないが、重好の署名があり、他の短冊と筆跡が同じである。重倫は下鹿島家四代で天保一二年（一八四一）生まれなので、その初老の賀はおそらく明治一三年（一八八〇）のことであろう。

② 鹿島本家短冊帖

鹿島本家が所蔵する短冊帖で、折帖二冊に和歌・俳句・漢詩などの短冊一九二枚を収める。平成二二年にその存在が明らかになり、原豊二氏が調査の結果を報告された。^{（注17）}その中に、歌集未所収歌であり詠歌年次は分からないが、重好の短冊が二枚確認できる。

いや高くつもれる君がとし波はかぎり渚に打ちよするらむ
をやみなき袖のしぐれになく涙いたくな添へそ天つ雁がね

③ 米子市立図書館所蔵 鹿島重好和歌短冊

服部喜久恵氏筆『鹿島重好歌集』が発見された際、他の資料とともに鹿島重好の短冊が一枚収められていた。

暮春

花に寝し春の日かづも暮れにけりあはれ胡蝶の夢ばかりにて

(集21 異同無し 鴨川集四郎集・春・春の歌の中に)

五、むすびに代えて

以上、他資料に見られる重好の和歌と、『鹿島重好歌集』所収歌の本文とを比較・検討する作業を行ってきた。その結果、資料によって歌集と一致する歌の多少、歌の語句の改変の有無、歌集内部での歌の扱いなどに差異があることが明らかになった。この現象は、稿者が度々指摘したように、重好本人の所為であると考えたときに最も納得がいく。この歌集の原本はやはり重好の自撰歌集であったと想像され、重好はそれを編むに際して、自分の過去の詠歌の中から、現在の自分の鑑賞眼に叶った歌を選び、歌の配置を決め、意に満たない表現を改める、といった作業を行ったと考える。服部喜久恵氏のあとがきは信頼してよく、『鹿島重好歌集』は、重好自筆の自撰歌集を直接書写し、他資料からの補遺歌を加えて成ったものであると考えられる。

鹿島重好は、当時の類題和歌集等に少なくない数の歌を残しているが、今まで歌集の存在は全く知られていなかったため、今回、書写の時期が新しいとはいえ、その直接の写しが見つかったことの意義は大きい。しかも、歌集所収歌二九三首と補遺歌六首の大部分は、他資料には見られない歌であり、雑部に多く収められる私的な贈歌からは、和歌を介しての重好の交流圏や当時の米子歌壇の活動の様子がうかがわれる。またこの歌集が、幕末から明治初期にかけて米子の町政と文化に重きを成した鹿島重好の作品であることを考えると、今後は米子

『鹿島重好歌集』について (渡邊 健)

の文学史だけでなく、郷土史の上からも貴重な資料として活用されることが期待される。

なお、今回、本歌集の内容・構成についてはほとんど触れられなかったが、稿者の見る限りでは内部の組織が整備されておらず、未定稿だったのではないかという印象を受けている。本歌集は四季・恋・雑の部立を持つが、四季・恋の歌の配列が必ずしも時間的推移に従っていないだけでなく、前後・錯雑している箇所もあり、この辺りの検討は今後の課題である。また、本歌集に収められた重好の和歌の表現の特色についても当然言及すべきであるが、すでに紙数も尽きているため、これらの問題は別稿にて論じることとしたい。

注

- (1) 原豊二氏「幕末の米子歌人―新出鹿島本家和歌資料の探求のために―」『山陰研究』第三号、平成二二年二月。
- (2) 以下、鹿島家と鹿島重好については、船越元四郎氏「鹿島家」(『米子の歴史と人物』立花書院、昭和五七年三月)・『米子市史 全(複製版)』(名著出版、昭和四八年一〇月)・『米子商業史』(米子市・米子商工会議所・米子市商店街連合会、平成二年三月)・『新修米子市史 第二巻通史篇近世』(米子市、平成一六年三月)・『鳥取県大百科事典』(新日本海新聞社、昭和五九年一月)の「鹿島氏」(船越元四郎氏)・「鹿島重正」(畠中弘氏)・「鹿島重好」(松尾陽吉氏)の項目を参照した。
- (3) 注2の「米子市史 全」は、鹿島長智が本居大平の門人であったとする。『国学人物志』は、高階惟昌編・小川寿一校『国学人物志』(名古屋国文学会、昭和九年八月)を参照した。
- (4) 『無題歌合集』は、鹿島長行の筆に成る袋綴一冊の写本。注1原豊二氏

の論稿に詳しい紹介がある。この書は外題を欠き書名が明らかでないが、ここでは原氏の呼称に従って『無題歌合集』と呼ぶことにする。

(5) 『無題歌合集』による。

(6) 辻森秀英氏「近世末地方歌壇の様相について―類題和歌集と地方歌壇の関係―」(『和歌文学研究』第二九号、昭和四八年六月)・「近世類題和歌集の歌人たち―地方歌壇の問題―」(『福井工業大学研究紀要』第三号、昭和四八年九月)。後に『近世後期歌壇の研究』(桜楓社、昭和五三年一月)に収録。

(7) (1) (5)の本文の引用は以下に拠った。(3)の『鴨川詠史集』二編を除く翻刻の方針は(付記2)による。

(1) 『無題歌合集』米子市立山陰歴史館所蔵
整理番号C1MG 0232、0233

(2) (3) 朝倉治彦氏監修 中澤伸弘氏・宮崎和廣氏編『類題和歌 鯉玉・鴨川集一〜六』(クレス出版、平成一八年四月)

(4) 『類題採風集二編上・下』刈谷市立刈谷図書館所蔵 国文学研究資料館紙焼C5605

(5) 『稲葉和歌集上・下』米子市立図書館蔵 Y91・127・1

(8) ④「霜月二日略会 日孝」は当初、嘉永六年一月二日に歌会として行われたものが、十一月一日に歌合に編み直された。(渡邊健・米子高専古文書の会「影印・翻刻 嘉永六年十一月十日鹿島歌合」(『米子工業高等専門学校研究報告』第五三号、平成三〇年二月、の解題を参照。)その際、次の重好の歌が「埋火」題で新たに一首加えられたが、この歌は『重好歌集』には採られていない。

老いぬれば心も細く成りにけり身を埋火の有りとばかりに

また、その歌合の末尾には、判者・小谷古蔭により選歌された秀歌六首が「選り歌」として挙げられており、重好の歌は三首が選ばれているが、「かひなれし」の歌は、その中に含まれている。

(9) 『類題和歌 鯉玉・鴨川集 六 類題和歌 鴨川集 詠史歌集 初編・二編』(クレス出版、平成一八年四月)の中澤伸弘氏による『類題鯉玉集』の解題参照。

(10) この「あふぎみる」の歌は、詞書では白居易の詩を心に思い浮かべて詠んだ歌とあるが、「挙頭望山月 低頭思故郷」は『唐詩選』に載る李白の「静夜思」の第三・四句である。「白居易」は重好の記憶の誤りであろう。

(11) 注1に同じ。

(12) 中澤伸弘氏「幕末詠史和歌の展開と国学の影響(上)(下)」(『国学院雑誌』第九七巻第四号・五号、平成八年四月・五月)。

(13) 『鴨川詠史集』二編は活字本であるが、引用に際し清濁を改め、送り仮名を補い、漢字は通行の字体に改めている。

(14) 『鴨川詠史集』二編は本来、嘉永六年(一八五三)刊の初編からさほど時日を経ずして編集されたものと考えられるが、編者の長澤伴雄は同年紀州藩の政治情勢の変化により閉門を申し渡され、さらに安政二年(一八五五)には揚座敷に拘禁され、同六年(一八五九)に自死するに至る。『詠史集』二編は未刊のまま遺されたが、伴雄の息六郎が大正二年(一九一三)に亡父の遺稿に本居豊頼の序と、自身で書いた跋、作者姓名録を加えて出版した。山本嘉将氏『加納諸平の研究』(初音書房、昭和三六年一月)・『近世和歌史論』(文教図書出版、昭和三三年一月)↓修正復刻版バルトス社、平成四年一〇月)参照。

(15) 注1に同じ。

(16) 『類題稲葉集』の序文には、中島宜門が撰集に当たったとき「嘉永の今に至るまで此国の歌人ども多方は洩らさず」と、広く鳥取藩内の歌人から歌を集めた事情が述べられている。

(17) 注1に同じ。

〔付記1〕

本稿は、山陰研究センターの山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」二〇一六～二〇一八年度、(研究代表者・野本瑠美)による成果の一部である。

〔付記2〕

本稿で取り上げた資料の翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。

- 1 漢字・仮名の表記は現行の字体によった。
- 2 読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。
- 3 繰り返し記号「ヽ」「〳」は原文のままとした。
- 4 「ハ・ニ・ミ・ノ」の片仮名表記は、現行の仮名に改めた。
- 5 仮名遣いは、歴史的仮名遣いと違うところも原文のままとした。
- 6 不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。

〔付記3〕

貴重資料の調査・掲載をご許可いただいた米子市立図書館・米子市立山陰歴史館、また、鹿島家系図の作成に当たってご教示をいただいた鹿島恒勇氏・鹿島美彦氏に御礼申し上げます。

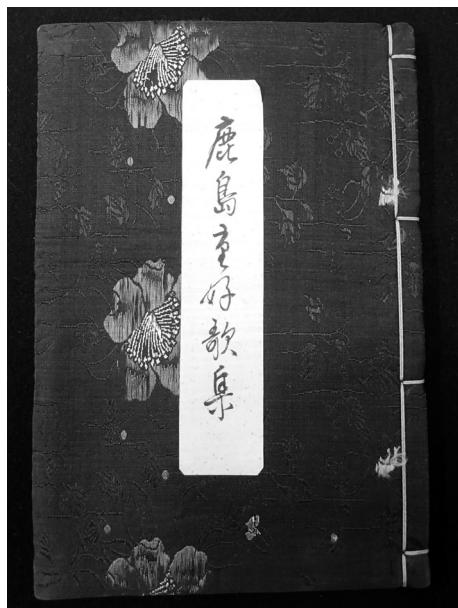


写真1

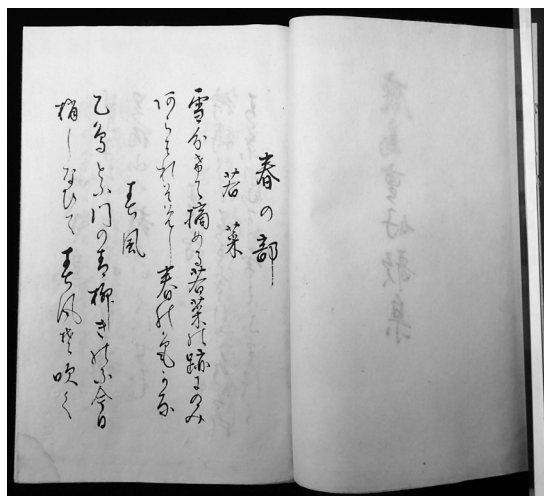


写真2

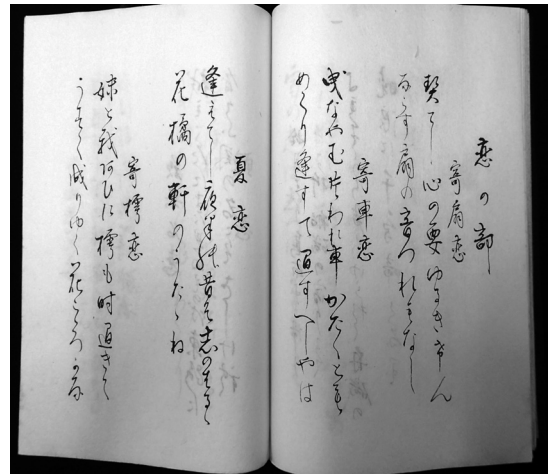


写真3

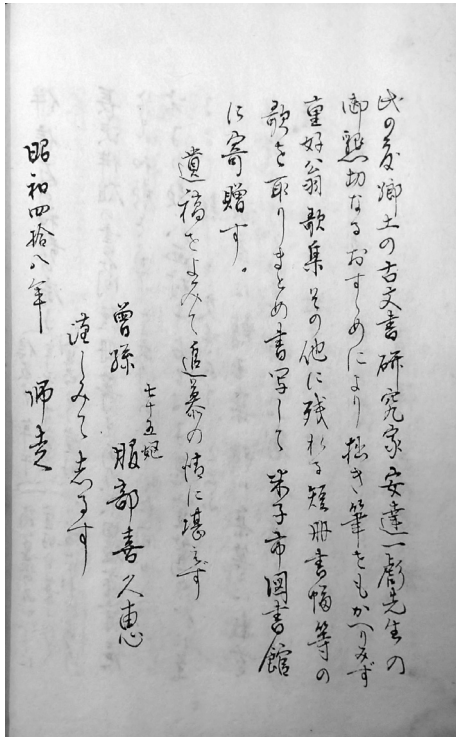


写真4

Study Notes “Kashima Shigeyoshi – kasyu”

Watanabe Ken

(National Institute of Technology, Yonago College Department of Liberal Arts)

[Abstract]

The Kashima family, a wealthy merchant in Yonago in the Edo era, produced many waka poet. Kashima Shigeyoshi must, above all, be a great waka poet. Shigeyoshi's collection of waka had been unknown, but recently “Kashima Shigeyoshi – kasyu” which Yonago City Library had owned came to light. According to its post script, in 1973 Hattori Kikue, Shigeyoshi's great-grandchild, transcribed this collection of waka from the manuscripts in Shigeyoshi's own hand. This is not an old manuscript, but as the result of survey, Hattori might have made a close transcription from the original book. In addition the possibility that Shigeyoshi selected his own waka to make this collection in the original book is high.

Keywords : The Kashima family, Kashima Shigeyoshi, Yonago poetry circle